

博物館だより

第89号 2014.3.28

百鬼夜行絵巻



博物館で今年度新たに購入した資料です。作者名、制作年ともに不明ですが、江戸時代後半の作と思われます。

百鬼夜行絵巻には多くの種類がありますが、この絵巻は、現存する中で最も古い百鬼夜行絵巻（真珠庵本 室町時代）に登場する妖怪の一部順序を入れ替えて描いたもので、同じ構成の絵巻が国際日本文化研究センター

に所蔵されています。国際日本文化研究センターのものと比べると巻首にある青鬼が失われ、青鬼が持つ槍の柄元と思われる部分から始まっています。

絵巻は、今年夏に開催する企画展「おばけ展～新信州七ふしぎ～」に展示する予定です。

(細井雄次郎)

善光寺地震における真神山の崩落とその後

弘化四年（1847）に起こった善光寺地震については、多くの研究があります。概説的に述べたものとして、近年では『長野市誌』¹ があげられるでしょう。

善光寺地震の特徴として、山間地における土砂崩れがあり、殊に犀川をせき止めた虚空蔵山（岩倉山）² の崩落が有名です。このせき止めは二十日余続き、ついには長野市の南部・川中島平一帯を洪水が襲いました。

私は別稿³ で全国に流布する善光寺地震の災害絵図、殊に虚空蔵山の崩落に関する絵図は、松代藩の手代と呼ばれる層が被害地を巡査した情報をもとにしていたこと、そして、善光寺地震の被害情報はさまざまな藩の役所等から流出していたことを述べました。

ここでは、善光寺地震における災害絵図 2 点を紹介します。これは、「丁未大地震山又ケ犀川留切図外」と史料名のついた絵図⁴ で、犀川のせき止め箇所を描いています。「丁未三月廿四日夜四時大地震山又ケ犀川留切図同四月朔日順見」【写真 1】とかかれた絵図（以下、「虚空蔵山崩落図」という）と、「此絵図八上之留メ之川シモ川中島へ水の出口之所之図也」【写真 2】とかかれた絵図（以下、「真神山崩落図」という）です。ただし、この 2 点の絵図がセットになるかは不明です。

「虚空蔵山崩落図」は、一般的に知られている図です。四月朔日に順見とありますが、『代官日記』⁵ によれば、三月晦日から四月八日まで代官・南沢甚之介は手代三人を連れて山中に出役しているので、おそらくはこの時に手代が

描いたものと推測されます。久米路橋や新町方面の村が浸水している様子は印象的です。

「真神山崩落図」は、従来、あまり知られていないかった図です。犀川が川中島への水の出口となる犀口と呼ばれる場所、現在の小田切ダムのあたりを描いたものです。

真神山の崩落について、松代藩は非常に大きな危機感を抱いていました。

犀川筋押埋候場所三ヶ所之内、小市村渡場北之方、真神山抜崩之義者、高サ廿二間程、南北八十間程、東西十間程川式江押出し、残り川幅僅七間程ニ相成、其儘差置候而者、聊之水ニ而も切込候儀ニ付、可成丈掘取申付候得共、中々人力之可及ニ無之処⁶

とあります。真神山の崩落によって犀川の流路が狭まり、これに危機感を抱いた松代藩は、人力でこの岩などを取り除こうとしたのです。



写真1

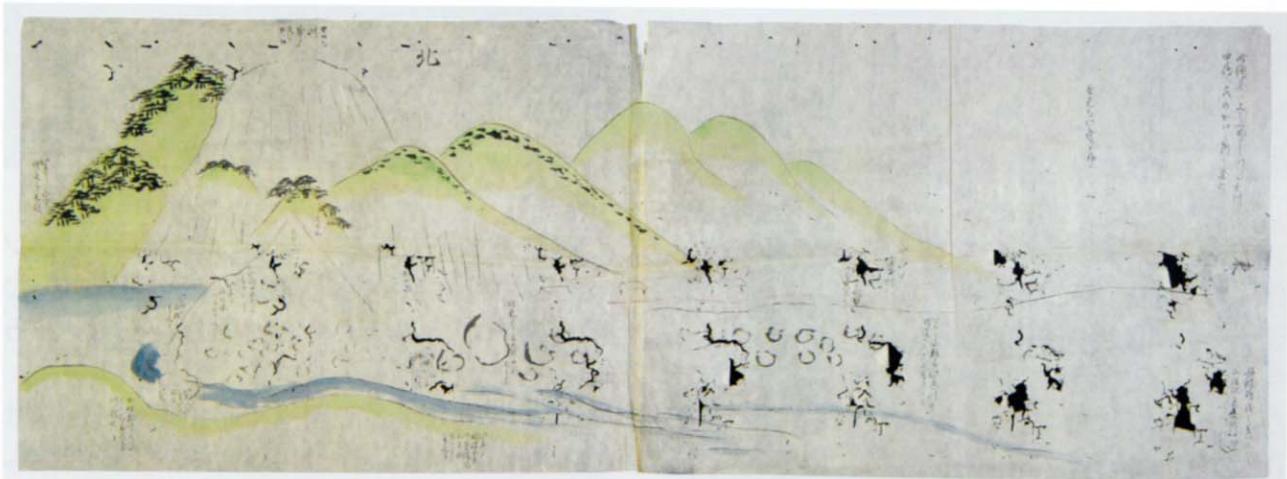


写真2

実際、「真神山崩落図」をみると、崩れた山について、「此山四五丈も高サアリ」と書かれています。また、犀川の対岸は普請がなされており、「此色々水際土手御普請所二重囲、東ノ方へ在之候」とあるので、二重に土手が作られていることもわかります。

真神山の崩落場所の早急な復旧が求められた松代藩は、次のような命令を村々に出しました。

一犀口急難除普請候儀、非常之儀とハ差申
村々格別ニ出精致し一段事ニ候、然ル處、真
神山押出し不用意難場ニ付、幾多之人夫相掛
候共、安心之処元々無御覚束候得者、御□一
ト出精致し少も、多く搔崩し候之様致度、依
之壱人前之人夫軒別ニ明十日早朝々晴雨ニ
不拘小松原村割場江可罷出者也

四月九日 宮 守人
柘 嘉兵衛
山 源太夫
竹 金吾
岡 荘蔵⁷

真神山の崩落箇所の岩等を人力で取り除く作業のため、軒別に人を出すように命じているのです。実際、この人夫を集めるために代官が村を廻っています⁸。このように、真神山については、塞がれた流路を確保するために松代藩は多くの労力をさきました。

しかし、虚空蔵山崩落の場所が決壊すると、真神山の崩落箇所は次のような状態となります。

此度之激水ニ而忽ニ押流百数十人ニ而動候
大石を川下或者川辺村内耕地等迄押出、小
市村突出之辺者丈六丈余ニも及候次第、

大水が押し寄せたことによって、真神山の崩落箇所は簡単に流されました。百数十人でやっと動かすような重い石ですら、簡単に下流へと押し流されたのです。

犀川のせき止め箇所3つのうち2つは、虚空蔵山の崩落の場所でした。残る1つは真神山の崩落場所でした。この緊急事態に、松代藩はどのような対応策を講じたのでしょうか。ここからは類推の域をでませんが、えて結論めいたことを述べておきたいと思います。

松代藩は虚空蔵山の崩落について、既に地震の翌日には情報として知り得ていたようです。また、犀川がせき止められ、これが決壊する可能性も分析していたはずです。それでは、なぜ真神山の崩落箇所に固執して大勢の人夫を動員したのでしょうか。松代藩は、虚空蔵山の崩落箇所についての復旧をあきらめ、このせき止め箇所が決壊したときを想定した対策を試みたと考えたいのです。

これまで、真神山の崩落についてや、その復旧作業の意義について論じたものは見られません。そのため、ここではあえて真神山の崩落について言及しました。松代藩の取った行動が、現代の減災政策に役立てればと思っています。

(原田和彦)

注釈

- 1 「善光寺地震」『長野市誌』第四巻 歴史編 近世二（執筆 長瀬哲）2004年
- 2 『弘化四末年大地震一件』（国文学研究資料館所蔵真田家文書う782）によれば、崩落した山の名を「虚空蔵山・岩倉山と両名」を使っており混同するので、虚空蔵山と使うこととしている。
- 3 拙稿「災害を記録する—災害絵図成立の一例として—」『信濃』第66巻第3号 2014年
- 4 国文学研究資料館所蔵真田家文書 し393
- 5 長野市立博物館所蔵 野本家文書A-605（『弘化四末年 日記 御代官』）
- 6 前掲註2
- 7 前掲註2
- 8 拙稿「松代藩における代官と手代－善光寺地震後の村の復興をめぐって－」渡辺尚志・福澤徹三編『藩地域の農政と学問・金融』岩田書院 2014年

はじめに

長野市立博物館には、本館と分館あわせておよそ10万点の自然資料があり、その半分以上は研究者や収集家の方々から寄贈していただいた資料が占めています。当館の展示活動は、こうした大勢の寄贈者の方々のご協力によって成り立っているのです。今回は当館の寄贈資料群の中から「田中邦雄化石コレクション」を紹介します。

田中邦雄氏と収集資料

故田中邦雄氏は松本市の出身で、古生物学、特に貝類化石の権威者です。昭和24年から平成元年まで信州大学教育学部・教養部で教鞭をとる傍ら、長野県内にある自然系博物館の開設や運営に多く係わるなど、長野県の地学教育の中心として多方面で活躍された方でした。また、信州大学退官後は平成元年から平成10年にかけて、長野市立博物館の館長を勤められましたが、平成11年に永眠されました（享年75歳）。

田中邦雄氏のコレクションは、信州大学に在籍していた40年間に収集されたものです。長野県内産を中心に化石・岩石・鉱物及び現生貝類の標本から構成され、総点数は1万数千件に及びます。



田中邦雄氏

田中邦雄化石コレクションの特徴と意義

田中コレクションの中心は、氏が専門とする化石資料です。田中氏は40年間に渡って長野県における化石研究の第一人者として活躍し、大勢の学生を指導しながら長野県の各地を調査して、1万点にも及ぶ膨大な化石資料を収集しました。田中氏が資料を収集した調査地は、長野県中の化石産地をほぼ網羅しています（図1）。その中には、現在では採集が困難あるいは絶産となつた産地の資料が少なくありません。

また、田中氏は長年の研究活動の中で新種の化石を多数発見しています。新種が発見された際に種を定義づけるための標本のことを「完模式標本」と呼びますが、田中化石コレクションにはこの完模式標本が7点も含まれています。

長野県中の化石を網羅し、完模式標本を多数含む田中化石コレクションは、長野県の化石を知る上で極めて重要な資料群なのです。

資料整理と収蔵資料目録の発行

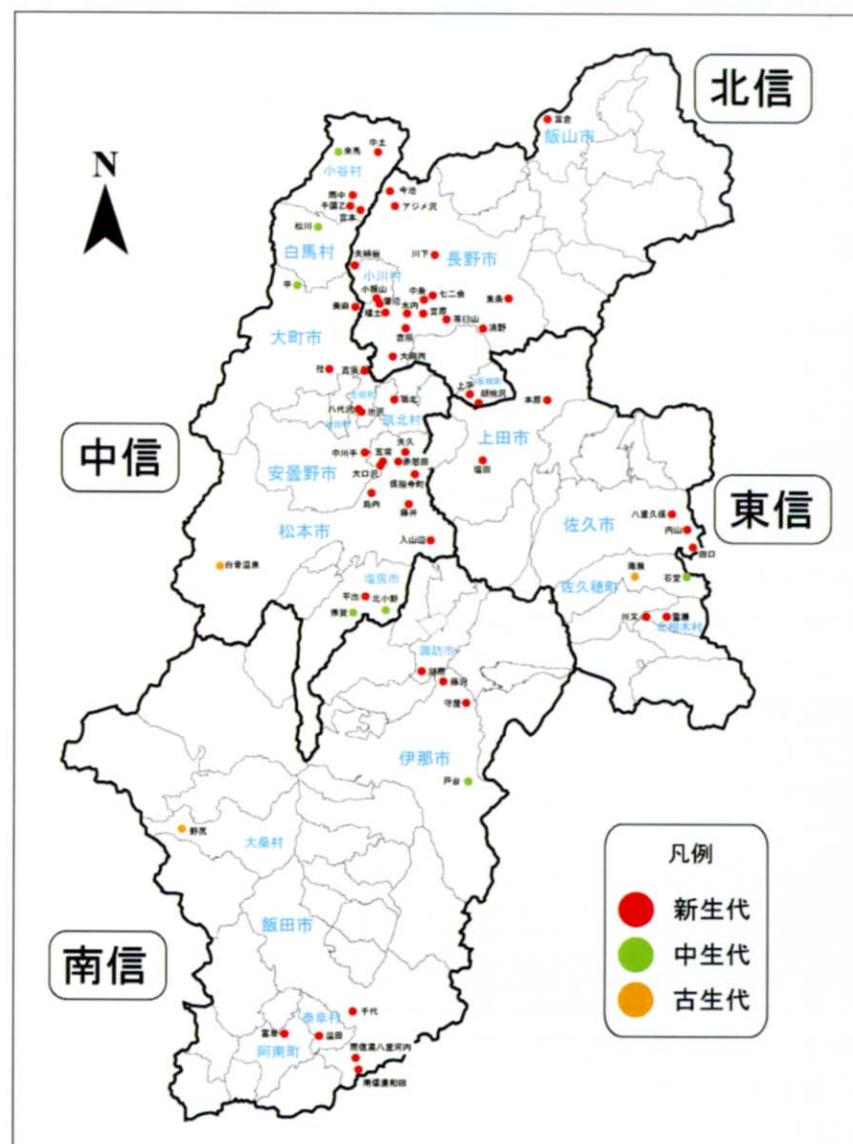
田中氏は生前、長年収集された多数の標本類を、信州新町化石博物館、旧戸隠村地質化石館および長野市立博物館分館旧茶臼山自然史館に寄贈されました。田中氏の没後、信州新町と戸隠の2館はいずれもその後の市町村合併により長野市立博物館の分館となり、分散していた田中コレクションが図らずも長野市立博物館へ集約される結果となりました。

長野市立博物館では、信州新町化石博物館が分館となったことをきっかけとして、それまで分散して収蔵されていた田中コレクションを集約する整理作業を続けてきました。この整理作業が昨年夏までにほぼ終了し、田中コレクションの全体像がようやく明らかになりました。

現在、信州新町化石博物館では、田中コレクションから長野県各地の特徴的な化石を選び出して紹介する企画展「長野県の化石—田中化石コレクション展—」を4月6日まで開催しています。また、このたび収蔵資料目録

「田中邦雄化石コレクション」を発行しました。この目録の冊子は非売品ですが、目録のPDFファイルを当館のホームページにて公開する予定です。この目録の発行により、田中化石コレクションの重要性が広く周知され活用されるようになることを願います。

(畠山幸司)



(図1)
田中化石コレクションにおける長野県内の
主要な化石産地



田中氏が新種として発表したタザワサルボウガイ
Anadara (Anadara) tazawensis Tanaka
(副模式標本)



田中氏が指導した研究者が新種を発表する際に田中氏の名前を
献名した、タナカニシキ
Chlamys ingeniosa tanakai Akiyama

*副模式標本：新種を発表した論文の中で、種を示すために複数の標本を用いた場合、完模式標本1点の他は副模式標本と呼ばれます。

横井弘三「河畔にて」の修復報告

今回は、平成 22 年（2010）に当館で行った横井弘三作「河畔にて」の修復事業の報告をさせていただきます。

この作品は、独特の画風で牧歌的な風景が描かれ、なんともものどかで微笑ましい風景画です。奈津女橋と琅鶴湖が背景に描かれ、手前には河畔でのんびり草を食む羊、そして親子らしき女性と子どもたちが描かれています。横井が信州新町に滞在した昭和 27 年（1952）に制作された地域のお宝です。

本題に入る前に、まずはこの絵を描いた画家についてご紹介します。横井弘三は、明治 22 年（1889）に長野県飯田市に生まれ、早稲田大学商学部を中退後独学で絵画を修得し活躍をしたという異色の画家です。大正 4 年（1915）、新しい芸術を目指し前年に創設された二科展でいきなり名誉ある賞・樗牛賞を受賞します。まさに彗星の如く中央画壇に登場し、当時脚光を浴びました。丹念な筆致と素朴な作風から、当時は“日本のアンリ・ルソー”とも呼ばれ注目されています。しかし「芸術は万人のもの」という信念と博愛主義に基づいた言動から、様々な非難を浴び画壇からは次第に遠ざかっていきます。そして首都東京の戦渦が激しくなった昭和 19 年（1944）、55 才で長野市に疎開をします。長野での横井は、行く先々で、その土地、そこに暮らす人々の絵を描きました。そして最後はすべて周囲の方々に分け与えてしまいました。その親しみやすい人柄が多くの人達に愛され今日では「我が家の横井さん」と呼ばれるぐらいの人気画家となりました。

そんな横井が、昭和 27 年（1952）、信州新町に 100 日間滞在し描いたのが、この「河畔にて」です。制作後約 60 年が経過した油彩画であり、より厳密に述べるならばベニヤ板（支持体）に油絵（描画材）で描かれた作品です。本来板であれば桜などの固い木を使用すると良いのですが、横井はどこでも手に入るベニヤ板を用いキャンバス代わりに使いました。しかし、戦後のベニヤ板は非常に質が悪いのが特徴で、絵を描くには不適切な支持体です。また以前は地区の公民館に展示されていたこともありその保管状態も悪かったといえます。

さて、美術作品の「修復」について少しご説明します。今日の修復技術では、処置をした場所がすぐに特定でき、オリジナルの状態にいつでも戻せることが基本となります。例えば、補彩をする場合などは、鑑賞が可能となるための必要最低限の範囲を、油絵ではなくすぐに除去できる修復専用の樹脂絵具を用いて行います。「修復」というと加筆されて新しくキレイになるというイメージがありますが、現在の修復技術においては、いかに作品のオリジナルの状態を永年保つことができるかという保存的役割が必要とされています。「修復」とはあらゆる文化財、そして博物館や美術館のためになくてはならない大切な事業といえます。そして、当館の宝である「河畔にて」も写真でご紹介する大手術を終えて再び蘇りました。これからも横井作品の大変な一点として皆様に楽しんでいただければと思います。

【修復前の状態】

- ①絵が描かれている板（ベニヤ板）には、縦の割れが無数に入っている。全体が大きく歪んで変形している。
- ②作品面の絵具が剥がれている箇所がある。虫のフンや長年の汚れで絵具の色が濁ってしまい、作品が鑑賞しにくい。

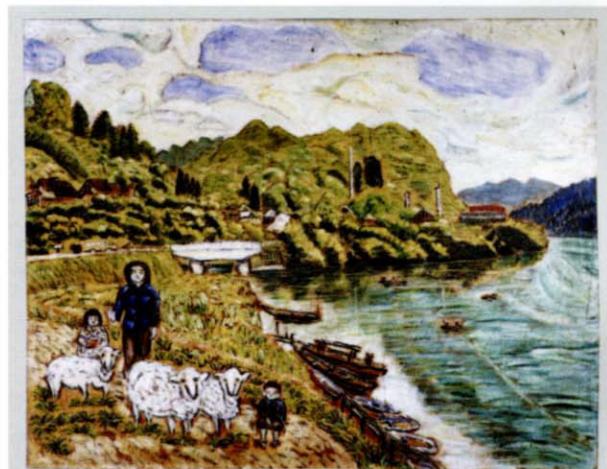


図1 修復前作品全体図

全体的に汚れが目立ち縦方向に細かい割れが無数にある。

③板は三層の合板で、裏面に大きな亀裂がある。



図2 作品裏面

中央の木目には波形の隙間がありベニヤ板の中の層が露出している。

【修復作業】

①板の変形を緩和するために三層合板のうち裏面から二層分を剥がし、絵の描かれている一層目のみにする。

(3mm あった板の厚さは約 1mm と薄くなった。)



図3 作品裏面

歪みを改善するために三層合板を一層ずつ剥ぐ。



図4 剥離の作業

②三層目の裏書き部分は、作品の記録として修復後の作品に戻す。そのため切除後、和紙で裏打ちを施した。



図5 文字部分の分離

③一層目の縦の亀裂を修復用接着剤でふさぐ。
また、裏側から麻布で補強する。



図6 一層目の周囲に麻布を貼る

④木の伸縮性を考慮し、ポリエステルの布を張った木枠に一層目を張り込んで固定する。

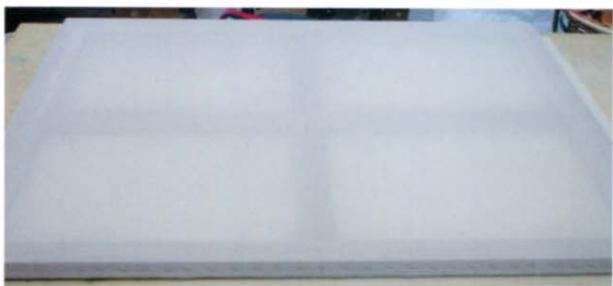


図7 ポリエステル布を張った木枠



図8
作品の張り込み

⑤画面全体の虫のフンや汚れを洗浄する。



図9 作品についている汚れをとる。

⑥絵具が剥がれてしまった部分に、石膏を埋め込み平らに形を整え、修復用樹脂絵具で補彩する。



図10 亀裂箇所に石膏を埋める。



図11 修復用の樹脂絵具を使って色をつける。

【修復後の状態】

作品の歪みや縦の割れの進行が緩和された。

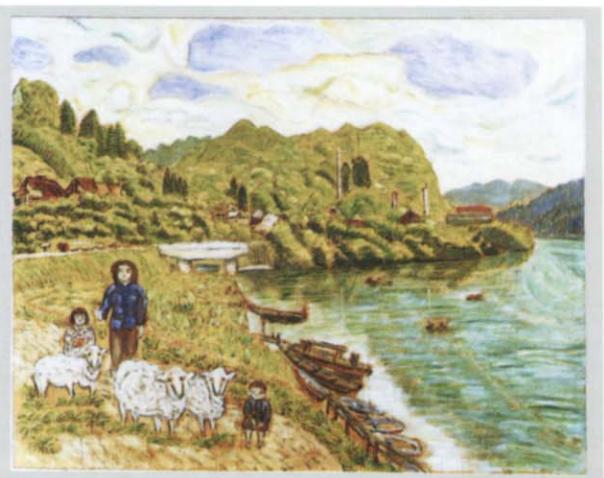


図12 通常の光で撮影した修復後の作品全体図。

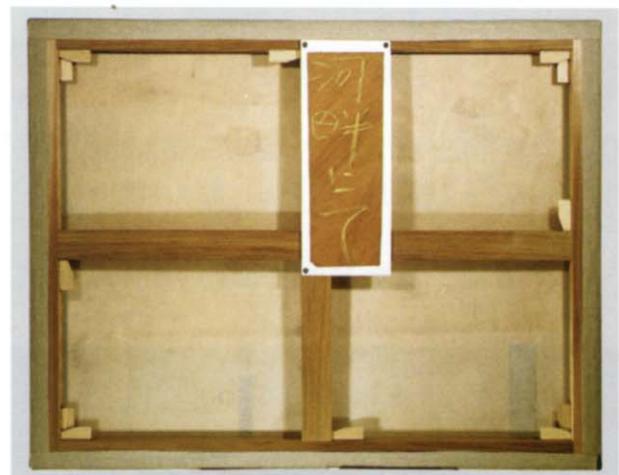


図13 作品裏面

黄色いチョークで書かれた裏書きも別パネルに作成され裏面に戻されている。(修復前の作品に残る記録的な要素については可能な限り引継ぐのが今日の修復の基本となる。)

(前澤朋美)

博物館のHPアドレス

<http://www.city.nagano.nagano.jp/museum/>

長野市立博物館

〒381-2212 長野市小島田町1414
TEL:026(284)9011



▲長野市立博物館
携帯サイト

戸隠地質化石博物館

〒381-4104 長野市戸隠板原3400
TEL:026(252)2228

鬼無里ふるさと資料館

〒381-4301 長野市鬼無里1659
TEL:026(256)3270

信州新町美術館・有島生馬記念館・信州新町化石博物館

〒381-2404 長野市信州新町上条88-3
TEL:026(262)3500

ミュゼ蔵

〒381-2405 長野市信州新町37-1
TEL:026(262)2500